

キラリ★ 話題の「ひと」



飯田チカさん
(犬伏新町)

○プロフィール
雅号・景月 昭和21年生まれ
前佐野市文化協会副会長（現在は参与）
佐野書道連盟副会長 読書書法展会友
書道教室「景月書院」主幹

障害ある方への学習支援で 文部科学大臣から表彰

飯田さんは小学3年から習字を始め、20代から50年あまり、書道を指導しています。昨年11月、障害者の生涯学習支援の功績で表彰、全国で14人の重みある表彰です。

障害のある方への教室は月1回1時間、場所は市民活動センターです。「箸が持てれば、筆が持てる」との考えから飯田さんが市に提案、市が8年前に生徒募集、現在7人の在籍です。習字教室では生徒の礼儀正しさを、「お願いします」、「ありがとうございます」などの挨拶の言葉、集中心、作品の良い点を褒め、改善点を的確に指摘する先生の指導力に感動し、生徒も先生の言葉に熱心に耳を傾け、あるべき教育の姿を拝見しました。

作品発表会も2年に1回、市民ギャラリーで開催。今年3月「ほくもわたしもお習字大好き」のテーマで3回展を実施。昨年は市役所1階市民活動スペースで、他団体と合同展示もありました。こ

うした無償でのボランティア活動が認められた表彰です。

書道教室・景月書院は作品発表会を4年に1回文化会館で開催、6月に12回展を開きました。武道館の全国書初め席書大会では「全国優良団体賞」を3年連続受賞です。

障害を持って活躍し注目される方もいます。詩人・画家の星野富弘さんや書家の金澤翔子さんなどです。同時に身近なところで、障害にめげずに頑張る方、その家族、そして指導に当たることが多い。その姿に私も大きく励まされ、もつとこういふ方々に温かな光が当たればいいと思いました。

(市民記者 福田満)



市長からの メッセージ



虫の声に深まる秋を感じる頃となりました。皆さんはいかがお過ごしでしょうか。

いよいよ今月25日から3日間、誰もが活躍できる社会の実現に向けた全国規模の大会である「日本女性会議」が開催されます。「ようこそ！『人生100年時代』さあ、共に語り、絆結ぼう」のテーマのもと、現在、全国各地からたくさんの方の参加申し込みをいただきました。また、佐野市はもとより県内外から多くのスタッフやボランティアの方々も活動してくれています。市民の皆さんも、いろいろな面でもおとなしきまますので、全国からのお客様を温かく迎えてもらいたいと思います。

「人生100年時代」、先月から敬老会が各地域で開催されています。本年度、本市で100歳を迎えられる方は男性2名、女性27名であり、100歳以上の方は総勢77名と昨年と比べ3人増となりました。最高齢者は107歳の女性の方です。毎年10月に100歳を迎えた方々を慰問していますが、今年も皆さんの笑顔にお会いできることを楽しみにしています。

先月9日、関東南部を直撃した台風15号は千葉県で猛威を振るい、暴風被害により広範囲に長期間の停電が続く、被災地の日常生活に大きなダメージを与えました。東日本大震災でもそうでしたが、電力依存社会での被害拡大を改めて痛感させられました。

本市でも、7月に植上町を中心に起きた竜巻被害に続き、先月10日には赤見地区で突風による被害が起きました。いずれも人的被害はありませんでしたが、まだまだ台風シーズンですので、日頃からご家庭でも災害への備えを万全にしてください。

岡部正英



第3 2回くずう原人まつり

8月24日(土)・25日(日)、葛生の嘉多山公園で開催されました。

オープニングセレモニーは毎年恒例の「原人火おこし」から始まり、青藍泰斗高校書道部が書道パフォーマンスでまつりのテーマ「くずうから夢と元気を」の文字を力強く書き、まつりがスタートしました。

会場ではわんぱく広場や親子ワイワイコーナー、ふれあい動物園が親子連れなどでにぎわい、また今年も葛生出身のレーシングドライバー・石澤浩紀さんがレーシングカーで道を走り抜け、訪れた方々からは歓声が起こりました。

フリーステージや原人ステージでは出演者が歌やダンスでまつりを盛り上げました。フィナーレでは大迫力の和太鼓の共演があり、会場の皆さんも力強い演奏を楽しんでいるようでした。



いちご一会とちぎ国体に向けて

8月28日(水)、2022年(令和4年)に開催される「いちご一会とちぎ国体・いちご一会とちぎ大会」の佐野市実行委員会第1回総会が、市内ホテルで開かれました。

同実行委員会は、行政、体育協会、経済、運輸、福祉、飲食組合など各分野からの159人の委員で構成されており、心のこもったおもてなしを提供するため、準備を進めています。

総会では、実行委員会会長である岡部市長が「スポーツ立市を掲げる本市。いちご一会とちぎ国体は、本市を全国へ発信するきっかけとなるもので、国体成功のため、実行委員、そして市民の皆様のご支援とご協力をお願いします」と挨拶しました。

いちご一会とちぎ国体では、本市において、正式競技としてバレーボール(成年男子)、ラグビーフットボール(全種別)が、デモンストレーション競技としてクリケット、ドッチボールが行われます。佐野市が一体となり、大会を盛り上げていきましょう。



佐野弁 ばんてい

樹木に関する方言と林業用語 丸太を「ホタ」という

田沼や葛生地方は山地が多いため、住宅地のほとんどは森林に囲まれています。かつてこの地方の人たちは、農業のかたわら林業や製材業にたずさわり、それによって生計をたてていました。このような環境で樹木に関する特殊なことは(林業用語)が使われ、地域独特の方言が使われるのはごく自然なことでした。これらの主なことは、今でも受け継がれています。

切り倒した丸い材木は、長さや太さに関係なく、「まるたがあるいは「まるたんぼう」といいますが、方言ではこれを、ホタ(ボタ)とかホタンポー(ホダンポー)などといいます。まるたは、普通3メートルほどの長さに切りますが、これもホタ(ボタ)・ホタンポーといえます。

「山っ際にあるドバ(まるたの集積所。土場)には、ホタンポーが山ほど積んであったデー(よう)。あんなにアッチャー(あつては)、トラック何十台もあるダンベ」

杉や檜が成長するために、質のよくない木は切り倒さなければなりません。これを間伐(かんはつ)といい、方言ではホダギリといえます。ホダは「まるた」の意。ところで、杉や檜は総称してアオキといえます。一年中葉が落ちず、緑色をしているからです。

まるたを柱や板にするために、3メートルほどの長さに切ることをタマガルといいます。切ったまるたはタマ・クルといい、一本、二本、三本の「本」という意味です。木の根元の方から、ヒトツクルまたはモトツクル(ヒトツタマ)、フタツクル(フタツタマ)、ミツクル(ミツタマ)といいます。「この杉は伸びがいいから、ヨックル(4本)グレーは取れるダンベ」

(市民記者 森下喜一)

今回の表紙 「日本女性会議2019さの10月25日(金)～開催！」

～ようこそ!「人生100年時代」さあ、共に語り、絆結ぼう。～をテーマに、いよいよ開催されます。(絵:安藤勇寿「心をつなぐ」)

